

モニターニュにおける認識と 選択のメカニズムに関する一考察

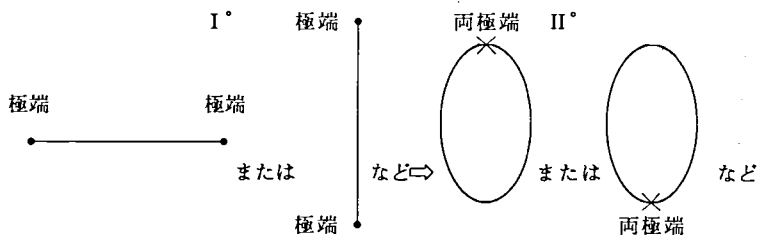
— 両極の一致・中間との対立 —(3)

奥村 真理子

IV. 認識の対象と位置関係および移動のイメージ

われわれは、『エセー』第I巻第54章「つまらぬ器用さについて」における「両極が一致する事物」の例をはじめ、モニターニュが「両極の一致・中間との対立」という形で表している文章について、主としてその認識と選択の内容を考察してきた¹⁾。ここでは、この認識と選択を構成している位置関係および移動のイメージの詳細な分析を試みよう。

第I巻第54章に集められている事例の導入として記されている、「誰が一番多く、両極が一致する事物 (choses qui se tiennent par les deux bouts extremes) を集められるか」という遊びのテーマ自体、位置関係と運動(移動)のイメージを内包している。第一に、二つの極端を持つものとは線分であり、その線分上においてもっとも隔てられた位置関係にあるものが両極端である。第二に、この線分の両極端が結びつくという運動(移動)のイメージが加わっているのである。線分の方角も、両極端の結合の形態も限定されていない、この位置関係と運動のイメージは、漠然としたものである。われわれはこのイメージを、たとえば下図のように描けよう。



本稿においてわれわれは、両極端が中間より評価されている場合（〔極端＝極端〕>中間）、両極端を上位に置き、説明の便宜上仮に▽型と呼び、その逆の場合（〔極端＝極端〕<中間）を仮に△型と呼んできた。これらはそれぞれ、図1のII°の左側と右側に相当する。ただし、イマージュII°は、いずれの事例においても、《se tiennent en》《se rencontrent en mesme point》《se concurrent en》など結びつきや出会いや合流や匹敵を表す動詞で表現されていたり、単に《et》《ny》《aussi》《aussi bien que》《comme》《tout ainsi comme》などの同等性を表す接続詞（句）によって表現されていたりするにすぎない。すなわち、イマージュII°における両極端の接点は、どこでもよいと言える。ただ、「身分の上下」「教養の高さ／低さ」など、一般的にわれわれも、また後に見るようにモンテニユも、何らかの価値を表現する際しばしば用いる位置関係のイマージュにしたがって、近似的な図形の例としてII°のように描いたのである。

他方、I°の線分のイマージュは、上記の遊びのテーマのように漠然としたものから、上下、前後等の方向性が明示されたものまで、様々である。したがってわれわれは、I°の線分のイマージュの形態（方向）分類によって、▽型および△型の認識のおのおのについて、認識の対象を考慮に入れつつ分析を進めていこう。

1. 「〔極端＝極端〕>中間」の認識の対象と位置関係および移動のイマージュ

◆上下の位置関係および移動のイマージュ

「つまらぬ器用さについて」において上記のテーマの直後に続く事例①～④は、社会階級と宇宙の位階（神々－人間－動物）における両極の一致・中間との対立である。そこでは、尊称で呼ばれること（①Sire、②Dame）、テーブルクロスの使用を許可されること（③）——後にも述べるように、これらは必ずしも「両極>中間」という価値付けの認識とは言い切れないが一応▽型である——および感覚の鋭敏さ（④）において一致・対立する両極と中間が、次のような言葉で表現されている。

①極端：la plus eslevée personne de nostre estat, qui est le Roy／

中間：ceux d'entre deux／極端：vulgaire; marchans

②極端：les femmes de qualité／中間：les moyennes／極端：celles

[femmes] de la plus basse marche

③極端：maisons des princes／中間：—／極端：tavernes

④極端：les dieux／中間：les hommes, qui sont au moyen estage／

極端：les bestes

事例①、②、④は明確に上下の位置関係を示す語彙を含んでいる：《la plus eslevée personne》(①)、《la plus basse marche》(②)、《moyen estage》(④)。また、これらの語によって、《d'entre deux》(①)、《les moyennes》(②)も、上下の位置関係における中間を表す。したがって事例①および②では人間の社会階級が、事例④では宇宙の位階が、上下の位置関係のイマージュを構成しているのである。さらに、このイマージュを表現する語彙を含まないが、事例①、②と同じく社会階級の両極端の一致を述べている事例③も、事例①、②と事例④の間に置かれることによって、上下の位置関係のイマージュの中に吸収されていると考えられよう。ところで、社会階級、宇宙の位階という上下の位置関係のイマージュは、慣用として定着しているイマージュである。したがって、社会階級や宇宙の位階という概念がモンテーニュにこの上下の位置関係のイマージュを想起させたのではなく、両極が一致する事物→縦の線分→社会階級／宇宙の位階、という順で、先行するイマージュが概念を想起させたと考えられる。世間一般に流布しているこれらの垂直的空間のイマージュに、両端が結びつく運動のイマージュを与えているところに、モンテーニュの独創性を見ることができよう。社会通念として定着している階層のイマージュの上下関係が、モンテーニュの柔軟なもの見方によって固定性を失い、運動性を付与されるのである。

だが、線分のイマージュがモンテーニュに想起させる概念は、本稿IIにおいて論じたように▽型のほとんどの場合、人間の精神的能力の差異である。モンテーニュは、社会的身分等の差異を人間相互の非本質的な差異と呼び、これに

対して本質的と呼ぶ精神的差異に関して「地上から天までの隔たりと同じくらい無数の段階 (autant de degrez d'esprits qu'il y a d'icy au ciel de brasses, et autant innumerables)」(I, 42, p.259) を認識している。この認識において上下の位置関係のイマージュが機能しているのと同様に、キリスト教徒に関する両極の一致を表した事例⑬では、事例④で「宇宙の位階を表現していた語《estage》が、人間の知的・精神的能力の段階を表現している。この事例における両極端と中間の三項目は、文の順序にしたがって記すと、

極端 : esprits simples, moins curieux et moins instruits

中間 : moyenne vigueur des esprits et moyenne capacité

極端 : grands esprits, plus rassis et clairvoians

であり、人間たちが知的・精神的能力の差異によって弁別・対比されており、さらに、中間の(中途半端な)知的・精神的能力のゆえに誤った思想を抱いた後に偉大な精神の人々と同じく立派なキリスト教徒になる人々がいることが、《Pourtant en voyons nous aucuns estre arrivez à ce dernier estage par le second》と表現されることによって、上記の三項目が人間の知的・精神的能力の「階層」となるのである。ここではさらに、《arrivez à …par》という表現によって、移動のイマージュが加わっている。動詞《arriver》は上下運動そのものを意味する語彙ではないが、《estage》とともに用いられることによって、上下運動の意味をもつのである。また、《Et en ce rang n'entens-je pas loger ces autres》という表現によっても、位置関係のイマージュは描かれている。しかし、これらの三段階の両極端のうちどちらが上なのか、ここでは明示されていない。立派な信者となる偉大な精神の人々が位置づけられている段階は《ce dernier estage》だが、この段階が三段階のうち「最後」に挙げられているためにこう呼ばれていると考えるのが妥当であろう。《dernier》が付帯的な意味として上下を表すとしても、《estage》を下から数える習慣と《arriver》がしばしば高い水準への到達を意味することから「最上階」ととることができる一方、『エッセー』には《dernier estage》の「最下層」の意味での用例がある²⁾。このように、用語だけでは上下を断定で

きないことを踏まえたうえで、われわれはこの最後の段階が最上階であろうと推測する。モンテニユが上下の位置関係のイマージュを学識や知的能力に関して用いる場合、賛否の如何にかかわらず、これらを有する者を上に位置づけているからである。だとすれば、モンテニユが自己を位置づけている素朴な精神の段階は最下層である。しかも、われわれが本稿IIにおいて述べたように、彼は第二の段階にいたことがあるのだから⁹⁾、下に降りたことになる。最下層、さらには下降という、ネガティブな意味合いを付带的にもつイマージュを、自己の選択に含意させているのである。しかしながら、ここに両極端が結びつく第二のイマージュが加わり、最上階も最下層も、種類は異なってはいても同じく良き信徒という点で結びつき、この知的能力の階層の上下関係は、常識的な通念を揺るがす運動性を見せるのである。

◆水平の位置関係および運動のイマージュ

人間の精神的差異は、上下の位置関係と移動のイマージュのみに限定されていない。素朴な農民と哲学者が、同じく紳士であることを述べた事例⑯における両極端と中間は、

極端：philosophes; natures fortes et claires, enrichies d'une large instruction de sciences utiles

中間：mestis

極端：paisans simples; ignorance de lettres

である。両極を形容する語句を見れば明らかなように、上に述べた、上下の位置関係のイマージュによって捉えられていた事例⑯と同様、ここでも学問・教養の程度と知的能力の差によって、両極端と中間に人間たちが位置づけられている。素朴な農民の位置は《le premier siege d'ignorance de lettres》であり、哲学者の位置は、中間の者が達することのできなかつた座席（n'ont peu joindre l'autre [siege]）であり、中間の者は「二つの鞍の間に尻を置き（le cul entre deux selles）」と、やはり位置のイマージュで形容されている。しかし、ここでは位置関係のイマージュは、上下ではない。《siege》は、『エッセー』において《place》とほぼ同義語的に用いられており、垂直・水平両者

の位置関係を表しうるが、《le cul entre deux selles》は水平的である。さらに、この認識に基づいたモンテーニュの選択を表す移動のイメージ：《je me recule tant que je puis dans le premier et naturel siege, d'où je me suis pour neant essayé de *partir*》における動詞、特に「後退する (se reculer)」によって、前後の位置関係のイメージであると言えよう。動詞によるイメージ、特に身体運動を表す動詞によるイメージがモンテーニュに特徴的であることは、既に指摘されてきたが⁴⁾、両極の一致・中間との対立の認識と選択における位置関係のイメージにおいてもこの特徴は現れているのである。ところで、いま述べたとおりここでは、人間相互の差異の認識のみならず、それに基づくモンテーニュ自身の有り方の選択もまた、位置関係と移動のイメージで表現されている。しかも、「後退する (se reculer)」という、一般的にはネガティブな意味合いをもつ移動を表す動詞を、モンテーニュが自己の選択を表現する言葉として用いている点に、彼の認識と選択のイメージの特異性を見ることができよう。

また、人生の災難に対する感じ方と不屈さにおける両極の一致・中間との対立を述べる事例⑫では、両極端と中間の三項目は、

極端 : sagesse; Sages (force d'un vigoureux courage; ame forte et solide)

中間 : ordinaire et moyenne condition des hommes

極端 : bestise

であり、精神的差異のうち認識力・判断力・精神力の差異による人間たちの弁別がなされているのだが、これらのうち、不幸に対して結果的に同じ平静さと不屈を示す蒙昧な者と賢者が、不幸の手前と向こう側に位置付けられている (ceux-cy [les bêtes] sont, par maniere de dire, *au deçà* des accidens, les autres [les Sages] *au delà*)。モンテーニュは、蒙昧な者が不幸に気づかないことを、「不幸のこちら側にいる」というイメージで捉え、不幸があるがままに認識したうて統御する賢者を、「不幸の向こう側にいる」というイメージで捉えているのである。また、賢者が不幸を乗り越える様は、

《(ils) s'eslancent au-dessus par la force d'un vigoureux courage》と、飛び越えて向こう側に行くイマージュで捉えている。彼らの中間の、不幸を認識し、感じ、しかも統御できない普通の人間は、《l'ordinaire et moyenne condition des hommes loge entre ces deux extremittez》と、不幸のこちら側と向こう側の間、すなわち不幸のただ中に置かれている。この認識も、水平的位置関係と運動のイマージュによって捉えられているのである。

◆上下・前後等の限定がない空間的位置関係と移動のイマージュ

だが、モンテーニュは、上下や前後等の方向性は意識せず、漠然とした相対的な位置関係や移動のイマージュによって、両極端と中間の三者を認識する場合もある。

両極端と中間の三者は、歴史家の三分類（II, 10, p.417）では、

極端：les Historiens fort excellens; les bien excellens

中間：ceux d'entredeux

極端：les Historiens fort simples; les simples; le bon Froissard

であり、詩における両極の一致・中間との対立の認識を述べた事例¹⁸では、

極端：poësie parfaite selon l'art

中間：poësie mediocre qui s'arreste entre deux

極端：poësie populaire et purement naturelle; villanelles de Gascongne;

chansons qu'on nous rapporte des nations qui n'ont congnoissance

d'aucune science, ny mesme d'escriture

であり、人間の精神的能力の差異が弁別の基準となっている点で、他のほとんどの▽型の認識と同様である。だがいずれも、《ceux d'entredeux》、《poësie mediocre qui s'arreste entre deux》と、上下、前後等の方向性は明確でない。位置関係のイマージュの基本としての相対性のみが現れていると言えよう。

また、不幸に対する感じ方と不屈さに関する人間相互の精神的差異を認識の対象とする第III巻第10章の文章（pp.1014-1015）には、

極端：aucuns sages

中間：les ames qui auront à voir les evenemens contraires et les

injures de la fortune en leur profondeur et aspreté, qui auront à les poiser et gouter selon leur aigreur naturelle et leur charge; nos ames communes; nous autres petis

極端：les ames qui, par stupidité, ne voyent les choses qu'à demy
という「つまらぬ器用さについて」における事例⑫と酷似する両極と中間を見出すことができ、事例⑬における両極の一致・中間との対立の認識に基づいた、中間の者としてのモンテーニュの不幸への対処の選択が述べられている。だが、⑫と同様の認識に基づいているにもかかわらず、ここでは上下の位置関係のイマージュは現れず、「われわれは（賢者の）このような模範的行為には少しも到達できない（nous n'y arriverions point）」と、方向性に関しては漠然とした空間的位置関係のイマージュが現れているのみである。しかしここでは、賢者の選んだ「別の道」（Je sçay bien qu'aucuns sages ont pris autre voye）と対比される「われわれ普通の魂の者」の選択が、不幸の原因の中に「入り込む」ことを避け、不幸へと「通ずる道」を「迂回する」（elles employent leur art à se garder d'en *enfiler* les causes, et en *destournent* les *advenues*）、不幸によって味わう苦悩の「嵐をもっとも遠くから逃げる」（A nous autres petis, il faut fuir l'orage de plus loing）、と表現され、回避と避難の意味を持つ空間移動と道のイマージュで捉えられているのである。

さらに、同じ章の同じ文脈で述べられた、情念に関する両極の一致・中間との対立の認識とそれに基づくモンテーニュの選択を表す文章（*ibid.*, pp.1019-1020）も、同じく方向性の漠然とした空間的位置関係のイマージュを持つ（*La moyenne region loge les tempestes; les deux extremes, des hommes philosophes et des hommes ruraus, concurrent en tranquillité et en bon heur*）。また、モンテーニュの選択は、「あのストア的な高潔な不動心に到達できない者は、わたしのこの庶民的愚鈍の膝に逃げ込むがよい（Qui ne peut *atteindre* à cette noble impassibilité Stoicque, qu'il se sauve au giron de cette mienne stupidité populaire）」という、やはり避難の空間的移動のイマージュで表現されている。さらに、「暴風雨を宿らせる」「中間の地帯」に対し、

「庶民的愚鈍の膝」（座った人の腰から膝までの部分を指し、子供を膝に乗せて保護する親や、さらには安全性や安心感のイメージを伴う）がコントラストをなしている。彼の選択としての移動は、性格を持つ場所への移動として認識されているのである。事例⑫と、これに酷似する認識に基づいた選択が述べられている第Ⅲ巻第10章中のこれらの二つの文章を比較すると、人間相互の精神的差異の認識が主題となっている事例⑬では位置関係の方向性が明示されているのに対し、選択の方に重点が置かれている文章では位置関係の相対性と位置や移動の性格が表現されているという点で異なっている。

以上の事例から、位置関係のイマージュは、位置関係の相対性が基本となっており、必ずしも方向性は現れなかったり、そのかわりに位置や移動の性格のニュアンスが強くなったりすると言えよう。

◆時間的移動のイマージュ

事例⑭における、初歩的無知 (ignorance abecedaire) / 学問 (science) / 博学の無知 ([ignorance] doctorale) という▽型の両極の一致の認識の対象は、これまで取り上げた事例と同じく、知識・学問の差異である。この認識を記したモンテニユの手稿⁹⁾は、空間的位置関係のイマージュが時間的位置関係のイマージュに席を譲り、イマージュがふくらみと明瞭さを得ていくとともに、この認識が深まり明確に形を成していく様を示しているように思われる。手稿の文字の並び具合と抹消線から推測される書き込みの順序に従って、この推移を追ってみよう。

1° *《que l'infime estage est le giste de l'ignorance le second de la science. Le supreme de l'ignorance encores. Et se peut dire aussi》* 明らかに垂直的位置関係のイマージュだが、イマージュと同様、二つの無知の特徴も単純であり、肉付けに欠ける。

2° *《que [sic.] il y a une ignorance abecedere qui precede la sciencie un'autre⁹⁾ doctorale et Socratique qui suit la sciencie.》* イマージュは空間的あるいは時間的な前後の位置関係に交替。二つの無知の性格にコントラストが付いている。

3° 《qu'il y a ignorance abecedere, qui *devance* la science, un'autre doctorale et Socratique, qui *suit* la science: *ignorance que la science fait et dicte tout aïsi come elle desfait la premiere.*》書き加えられた節により、前後の位置関係が時間的となる。同時に、二つの無知の知識との関係がはっきりする。

4° 《qu'il y a ignorance abecedere, qui *va devant* la science, un'autre doctorale, qui *vient apres* la science: *ignorance que la science fait et engendre tout aïsi come elle desfait et destruit la premiere.*》時間的前後の位置関係を表す語が、他動詞から、前後を意味する前置詞を伴う自動詞に替わることで、前後関係が浮き彫りになる。これとともに、後半部の動詞の書き換えと付加により、知識の各々の無知への作用と関係性（作成・産出、解体・破壊）が明確化。

すなわち、この手稿は1° 上下の位置関係のイマージュ、2° 前後の位置関係と移動のイマージュ、3°・4° 時間的な前後の位置関係のイマージュを媒介に、初歩的無知と学問と博識の無知という両極の一致・中間との対立の認識が明確になっていく過程を示していると同時に、空間的位置関係と時間的位置関係が、モンテーニュにおいて、同じく相対的認識を促すイマージュとして機能しうることを示していると思われる。

*

以上のように〔極端＝極端〕>中間の認識は、神々／人間／動物という宇宙の異なる存在と、身分あるいは学問・教養、芸術的技巧、判断力、精神力という知的・精神的能力において異なる人間たちを対象としており、彼らの差異を表す極端と中間は、単なる程度概念としてではなく、文字通り彼らを位置づける位置関係と移動のイマージュを成している。さらに、モンテーニュの自己認識も他者との比較による相対的な位置づけであり、自己に相応しい在り方の選択も、この位置関係における移動として捉えられている。

だが、極端>中間>極端としての位置関係のイマージュは、いずれも特に独創的でも奇抜でもない。しかし、これに両極端が結びつくイマージュが別の観

点から与えられることによって、この社会通念的な位置関係の固定性が奪われ、柔軟性と運動性が与えられるのである。これによって、学識や知能が「低い」「後進的」など一般にはネガティブな位置付けをされている者たちが、「普通の中間の」者たちを凌駕し、「最高」あるいは「最先端」の者と同じく幸福を享受したり価値を得たりする存在に転ずる。また、この認識に基づき「下降」や「後退」として捉えられたモンテニユ自身のあり方の選択も、世間一般の価値観に囚われない、柔軟で率直かつ深い移動となるのである。

さらに、モンテニユが人間相互の差異における両極の一致・中間との対立の認識および自己の選択を様々な観点から行うのと同様、これらの位置関係および移動のイメージは多様であり、同じテーマに関する認識が、異なる方向性を持つことさえある。このように認識とイメージの関係が画一的でも体系的でもないからこそ、各々の認識とイメージは一体であり、相互に連動していると考えられないだろうか。

2. 「〔極端＝極端〕＜中間」の認識の対象と位置関係および移動のイメージ

◆水平的位置関係および運動のイメージと範囲および停止のイメージ

「極端／中庸／極端」について位置関係のイメージを考えると、もっとも一般的に人が思い浮かべるイメージは、水平方向のイメージではないだろうか。モンテニユもまた、「〔極端＝極端〕＜中間」の認識において中間を中庸として選択するとき、しばしば水平方向の位置関係のイメージにおいてこれを捉えている。

彼が「孤独について」の中で、隠棲に適した仕事（活動）の仕方を述べるとき（I, 39, p.246）、《Au menage, à l'estude, à la chasse et tout autre exercice, il faut donner *jusques aux derniers limites* du plaisir, et garder de s'engager *plus avant, où* la peine commence à se mesler parmy》と、「快樂の最後の限界（＝楽しくできるぎりぎりのところ）まで」という範囲を示し、仕事が苦痛になり始める専心の程度を、限界の「先（＝さらに前方）」として位置づけている。むろん《*jusques aux derniers limites*》も《*plus*

avant》も、程度を表す慣用表現であるが、この次に、《Il faut réserver d'embesoignement et d'occupation (...) pour nous garantir des incommoditez que tire après soy l'autre extrémité d'une lâche oysiveté et assopie》という文が続き、無為が「不快を後ろに連れてくる」「反対の極端」が示されることで、後方に無為、前方に多忙という、前後の位置関係のイマージュが形作られているのである。

だが〔極端＝極端〕＜中庸の認識の場合、水平的位置関係のイマージュは、その方向性よりも、「範囲」と「停止」あるいは「距離」としての相対的位置関係が前面に出ている。

上の隠棲に適した仕事に関する認識と同様、無為と多忙の間に中庸 (une juste moderation entre ces deux extrémités) が見出されている恋愛に関する認識においても (III, 5, p.891)、「そこで止まるべきだ (il s'en faut arrêter là)」と、中庸の範囲の境界線での停止が表されている。また、モンテーニュが、人間の精神が全能であると言う学派と、無能であると言う学派を、同じく極端として認識するときも、人間があらゆる行為において節度を欠くことを「いたる所で節度を失う」(l'homme ne soit immodéré par tout)、判断によって自発的に節度を守れないことを「必然と、さらに先に進むことのできない無能さによる停止」しか持たない (il n'a point d'arrêt que celui de la nécessité, et impuissance d'aller outre) と表現し、中庸の範囲を前提とした「場所」と「停止」と「超過」のイマージュで捉えているのである (III, 11, p.1035)。また、生と死に対する態度も、モンテーニュが生に執着しないことが《ne tenir à la vie que par la vie seulement》、疝痛に堪えかねて死を愛慕する逆の極端に陥らないよう願う言葉が《elle ne me rejette à l'autre extrémité, non moins vitieuse, d'aymer et desirer à mourir》、という位置関係と運動と移動のイマージュで捉えられている (II, 37, p.760, a)。別の章では、《Pour vous loger en cette moderation, ny de fuir la vie, ny de refuir à la mort》(I, 20, p.96, c) と、生の放棄と死の恐怖がいずれも「逃避」という移動のイマージュで、死すべき生を率直に享受せよという自然の女

神の人間への言葉が「中庸に住まわせる」という居場所としての位置のイメージで捉えられている。これらの文章に見られるように、「中庸」には「範囲」とそれを越えない「停止」やそこに「居る」イメージが現れ、「極端」には「超過進行」や「非停止」や「能動的もしくは受動的移動」のイメージが現れている。

距離のイメージとしては次のようなイメージがある。モンテニユは、人間が物事を究極まで（「端まで (jusques au bout)」）理解しようとして非現実的な神秘主義に陥ることを、「道に迷う (se perdant)」、「人生の長い道程に疲労困憊して、幼児に戻るようなものだ (tout ainsi comme, laissez et travaillez de la longue course de nostre vie, nous retombons en enfantillage)」と表現している (II, 12, p.556)。すなわち、「長い道程／人生、道に迷う／幼児に戻る」という空間的距離と時間の長さや年齢が複合的に組み合わされたイメージで捉えているが、ここでの距離は、両極端の隔たりの大きさではなく、探究における行き過ぎの、距離的・時間的長さゆえに疲労困憊させるほどの甚だしさのイメージとして機能していると言えよう。むしろ両極端間の距離は、両極の一致の認識では、線分上でもっとも隔たった二点間の隔たりとしてではなく、両極の一致の面での隣接のイメージとして現れる。モンテニユは、精神の活動に関する両極の一致の認識 (II, 12, p.492) において、精神の極度の鋭敏さが人間を極度の狂気に陥らせることを、「一方から他方へ（調子が）移るのに（音高調節の）糸巻半回転 (un demy tour de cheville à passer de l'un à l'autre)」という弦楽器の調音のイメージとともに、「見分けられないほど近い (imperceptible le voisinage)」隣接のイメージで捉えているのである。

ところで、これらの事例では、水平的位置関係のイメージとして捉えられた極端—中間（中庸）—極端という線上を、モンテニユあるいは人間が進んだり止まったり留まったりするというイメージにおいて、人間の陥りうる状態やある状態から他の状態への変化が捉えられている。〔極端＝極端〕>中間の認識の場合は、主に異なる人間同士の差が位置関係のイメージをなしてい

たのに対し、ここでは、主としてどのような人間であれ、一人の人間が陥りうる状態が位置関係のイマージュをなしているのである。だが、〔極端＝極端〕＜中間の認識の場合も、一種類の方向性に限定されていない点では同じである。他の方向性のイマージュを見ていこう。

◆上下の位置関係および移動のイマージュ

欲望や快楽は節制や節度の概念に結びつきやすい概念であるため、極端と中庸の水平的位置関係のイマージュで捉えられがちである。だが、苦痛と快楽に関する△型の両極の一致の認識である事例⑩（*Le desir et la satiété remplissent de douleur les sieges au dessus et au dessous de la volupté*）では、上下の位置関係を表す《*au dessus*》と《*au dessous*》》によって、欲望と飽満が快楽の上下に位置づけられている。上下の位置関係のイマージュは、〔極端＝極端〕＞中間の認識では人間相互の精神的能力の差異を捉えるものとして機能していたが、別のテーマにおいても機能しているのである。しかも、〔極端＝極端〕＜中間という逆の認識において機能しているのである。

次の文章の垂直的位置関係と移動のイマージュは多くの〔極端＝極端〕＞中間の認識の場合と同様、学問・思想に関わるものであるが、ここでは人間の学問的思想的上昇志向が墜落到結びつき、下記のように上下の位置関係および運動のイマージュが次々と対をなして登場し、人間存在の範囲を超越しようとする人間の墜落が繰り返し描かれている（III, 13, p.1115, b, c）。

上／上昇運動：supercelestes: se hausser: hautains: haut montées

下／下降運動：sousterraines: s'abattent: terrestres et basses

さらに次の語彙もこれらに対応し、このイマージュの一端を担っている。

上／上昇運動：se transformer en anges: divin: immortalisation

下／下降運動：se transforment en bestes: humain: humble: mortel

このような上と下および上昇運動と下降運動の対比を繰り返しながら人間を捉えるモンテーニュとともにわれわれ読者の思考も、上下運動を繰り返しつつ促され、イマージュと思考とが一体となる。モンテーニュの認識とイマージュの不可分性が顕著に現れた一節と言えよう。

◆垂直的イマージュと水平的イマージュの混在

だが上記のような同種のイマージュの連続ばかりか、異種のイマージュの共存・混在や、あるイマージュから別のイマージュへの突然の移行も、『エッセー』において珍しくなく、両極の一致の認識にもそれが見られる。たとえば、哲学を過度に学ぶことの弊害を述べた文章（I, 30, p.198, c）では、上下運動のイマージュと水平運動のイマージュとが、違和感を感じさせることなく共存している。まず、的と矢の水平的位置関係と運動のイマージュ：《L'archer qui *outrépasse le blanc, faut comme celui qui n'y arrive pas*》⁷⁾。次に接続詞《et》のみを介して、光と闇に対する上下運動のイマージュ：《Et les yeux me troublent à *monter à coup vers une grande lumière également comme à devaler à l'ombre*》。続いて、カリクレスのセリフの要約には下降運動のイマージュ：《Calliclez (...) conseille de ne *s'y enfoncer* outre les bornes du profit》。最後に、この言葉へのモンテーニュの評価と賛同における道と逸脱の運動のイマージュ：《elle [la philosophie] (...) nous *desvoie* (...) du beau et plain *chemin* que nature nous a tracé》。

また、付随的外的幸福に依存しすぎることなく、快適な限りこれを享受するモンテーニュは、手中にあるものまで完全に拒否した哲学者たちの行為を、まず、「最下段に位置することで、新たな落下の心配をなくすため (pour, *s'estant logez en la plus basse marche, se mettre en seurté de nouvelle cheute*)」という垂直的位置関係のイマージュで捉える。次いで、この行為を「過度の徳 (vertu excessive)」と呼び、「そんなに前に行かなくても、十分することがある (Il y a pour moy assez affaire sans *aller si avant*)」という水平的位置関係のイマージュで捉えなおす (I, 39, p.243)。すなわちモンテーニュは同じ行為について、付随的外的幸福の所有の程度は垂直的位置関係で認識し、徳の程度は水平的位置関係で認識しているのである。

われわれは本稿IIIにおいて、モンテーニュが、中庸からの逸脱を避けるために、現在陥っている極端とは逆の要素を自己に与えることによって、バランスを取ろうとすることを述べた。そのような彼独特の、無理のないバランス感覚

に富む中庸の叡知が現れている第Ⅲ巻第5章の一節 (p.841) は、逆の方向性を自己に与えるイマージュとして表現されている。だが、そこでの過度の放縦と過度の謹厳さの対比には、垂直的方向性と水平的方向性が重なり合っている。まず、真面目な思索によって過度に放縦にならないよう努めていた若い頃の話では、放縦が「快活さ (alegresse)」として、これに対する真面目な思索が自己を「義務に引き止めておく (tenir en office)」ものとして捉えられている。モンテーニュは、この「快活」な状態から、年老いて過度に賢明になったことを、「～から～に陥ってしまった」と表現している (De l'excez de la gayeté je suis tombé en celuy de la severité)。この状態変化の表現は慣用的な表現だが、この文脈の中で、以前の状態を形容する「引き止めておく」ものを必要とする「快活さ」と、現在の状態を形容する重さや停滞を意味する語句「あまりに沈着であまりに重々しくあまりに熟成している (trop rassis, trop poissant et trop meur)」とともに用いられることで、《être tombé》の原義「落ちてしまっている」が生きてくる。この軽／重および活動性／停滞性の対比を伴う垂直的方向性のイマージュと交錯するようにして、前後の方向性のイマージュが現れる。まず《trop rassis, trop poissant et trop meur》を用いた文の前に、老いたモンテーニュの中庸からの逸脱を避ける方策：「意図的に少し自己を放縦へと放し」(je me laisse à cette heure aller un peu à la desbauche par dessein)、ときには「放埒な夢想の中で精神を休ませる」(et emploie quelque fois l'ame à des pensemens folastres et jeunes, où elle se sejourne)。そして後に、この方策を必要とする精神と肉体の現状：衰えた「肉体が不摂生から逃げ」、「精神を改正 (謹厳・賢明・節制) へと導いている」(Ce corps fuyt le desreiglement et le craint. Il est à son tour de guider l'esprit vers la reformation)。肉体が彼を導く方向に対立する放縦への移動と放埒な夢想の場所は、前方として認識されている。なぜなら、これらの逆の節制がモンテーニュを「あまりに後ろへ引き、無感覚にまで至らせて (me tire trop arriere, et jusques à la stupidité)」おり、後方として認識されているからである。こうして、狂愚と同じく、賢明さにも過度があり、節度

が必要であることを認識するモンテニユの中庸の叡知は、軽重の対比を伴う垂直的方向性のイマージュにおいて自己の状態の変化を捉え、前後の水平的方向性の対立のイマージュにおいて、現在の自己の精神と肉体の傾向の対立と、節度を保つ手段を捉えているのである。

このように彼の思考がある事柄から別の事柄へと移るとともに、あるイマージュから別のイマージュへと、イマージュも移っていくのは、モンテニユがイマージュによって認識し、思考するためではないか。イマージュと認識とが一体となっているためではないか。彼の認識や思考が形を成す時のイマージュを忠実に『エッセー』に記すことの方を、認識や思考を整合性のあるイマージュで表現することや、同一のイマージュで一連の文章を統一する修辞学の規則に従うことよりも選ぶからではないだろうか。

◆時間的位置関係および移動のイマージュ：空間的イマージュとの共存

空間的位置関係および移動のイマージュとは異なるようでいて、二つの無知と学問という▽型の両極の一致を記した異稿に見られたように、モンテニユの認識においては容易にこれと置換しあう時間的位置関係と移動のイマージュは、学問あるいは知的探究の始めと終わりが愚かさにおいて一致するという△型の両極の一致の認識（II, 12, p.544）では空間的イマージュと共存している。まず、垂直方向と水平方向の空間的イマージュの混在：《Voylà pourquoi les plus grossieres et pueriles ravasseries se trouvent plus en ceux qui traittent les choses plus hautes et plus axant, s'abysmants en leur curiosité et presumption》。上下の位置関係における上方のイマージュ《hautes》、同じく下降運動のイマージュ《s'abysmants》、および前後の位置関係における前進方向のイマージュ《avant》が、徹底的な学問の探究のイマージュとして同時に登場している。続いて直ちに：《La fin et le commencement de science se tiennent en pareille bestise》。三つの空間的イマージュが《fin》という時間的な順序のイマージュに置き換えられ、結びつく（se tiennent）という空間的運動のイマージュにおいて、《commencement》と両極の一致をしているのである。

◆温度のイマージュ：位置関係のイマージュとの互換性

最後に、〔極端＝極端〕＜中間の認識には分類できない事例を含むが、位置関係のイマージュの他のイマージュとの互換性が見られる例として、次の一連の事例を取り上げよう。第I巻第54章の事例⑥、⑧～⑩には前後などの位置関係および移動ではなく温度を表す語彙が冷熱（寒暑）の順に現れている。

冷たさまたは寒さ / 熱さまたは暑さ

- ⑥ la peur extreme / l'extreme ardeur de courage
- ⑧ froideur et desgoutement / appetit trop vehement; chaleur desreglee
- ⑨ l'extreme froideur / l'extreme chaleur
- ⑩ froid; la rigueur de l'hyver / une chaleur vehemente

さらに事例⑦は、明白に温度を表す語彙を含んではいないが、⑥と同じく恐怖と勇猛という両極の一致の認識であり、かつ、これらの文章に挟まれることによって、《tremousser》、《frissoner》が温度を連想させる。16世紀には気温や体温を高低で表現する慣用はまだなかったと推測されるから⁸⁾、位置関係のイマージュで構成された事例群の中に置かれたこれらの事例は、いかにモンテニユにとって事物の程度の差異の認識が位置関係のイマージュに結びつきやすいかということを示していると思われる。

*

以上のように、〔極端＝極端〕＞中間の認識では異なる存在あるいは異なる人間たちが位置関係のイマージュで捉えられ、線分の両極端や中間にそれぞれ位置づけられていたのに対し、〔極端＝極端〕＜中間の認識では、人間が陥りうる諸状態が位置関係のイマージュで捉えられ、中庸を守ることや極端に陥ることが、そこでの人間の停止や移動のイマージュとなっている。すなわち、モンテニユはいずれの場合も、「極端」や「中間」を単に程度の差異を表す慣用的な用語として用いているのではなく、文字通り、位置関係のイマージュによって対象を位置づけているのである。さらに、〔極端＝極端〕＞中間の認識にも、〔極端＝極端〕＜中間の認識にも、垂直・水平的空間や時間のイマージュが見られ、いずれかに限定されておらず、一つの認識において異なる位置関係

のイマージュが混在し、共存していることもある。また、モンテニユが一つの認識をしていく際に、ある位置関係のイマージュから別の位置関係のイマージュへと移りながら、彼の認識が明確になっていく過程が異稿に見られた。すなわち、位置関係のイマージュは両極の一致の認識と密接に結びついているが、モンテニユはこの認識に位置関係の統一的なイマージュを、その表現手段として、レトリックとして、意図的に選び、結びつけているわけではない。いわば、これらのイマージュは、両極の一致の認識とともに、一体のものとして、生まれ、形成されているのである。チボーデは『エセー』の一節について、「モンテニユの入口には想像力が現金をその国の通貨に換金しなければならない換金所があり、造形のフィギュールを運動のフィギュールに変換するようだ⁹⁾」と評しているが、この換金所では、事物の差異と類似の、位置関係と移動のイマージュへの変換もされるようである。

おわりに

われわれは、「つまらぬ器用さについて」の章と他の箇所にも、モンテニユが「両極の一致・中間との対立」という形で表している文章を考察してきた。「両極の一致・中間との対立」の認識とそれに基づく選択は、両極が評価され、中間が主に中途半端として批判される場合と、逆に、中間が主に中庸として評価され選択される場合に分類できる。〔極端＝極端〕>中間の認識の対象は、神々／人間／動物という宇宙における異なる存在や、社会的身分や知的・精神的能力によって異なる人間たちであるが、特に、人間相互の精神的能力の差異における〔極端＝極端〕>中間の認識に、モンテニユの位置関係のイマージュによる自己認識（自己の位置づけ）と自己の在り方の選択のメカニズムが顕著に現れている。モンテニユは自己を両極の中間に位置づけるが（両極と中間の弁別、自己の位置づけ）、中途半端な能力の人間の、単純素朴な人間にも劣る不幸や社会への弊害と、単純素朴な人間の精神的能力の極めて優秀な人間に匹敵する幸福や有益性を認識するため（〔極端＝極端〕>中間の認識）、単純・

素朴な者を直接あるいは間接的に見做うことを選択している（単純・素朴という極端への「後退」「下降」「避難」等）。このようにモンテーニュに自己認識と選択を促す位置関係のイマージュは、人間相互および自己と他者との弁別・対比から成り立っているため、「外的位置関係のイマージュ」と呼ぶことができよう。これに対し、〔極端＝極端〕＜中間における位置関係のイマージュは、「内的位置関係のイマージュ」と呼ぶことができる。すなわち、この認識の対象は、個々の人間を構成する諸要素であり、その要素の程度の差異によって両極と中間が認識されているが、〔極端＝極端〕＞中間と異なり、誰もが両極および中間のいずれにも陥ったり、屈したりする可能性があるものとして認識されている。つまり、個々の人間に普遍的に内在する位置関係のイマージュという意味で「内的位置関係のイマージュ」と呼べよう。このイマージュにおいて特にモンテーニュは、古代ギリシャ・ローマ以来の極端／中庸／極端の弁別と対比を行い、中庸を選択しているため、この認識と選択のメカニズムは、〔極端＝極端〕＞中間の場合と比較すれば伝統的あるいは一般的なものかもしれない。だが、われわれが本稿Ⅲで考察したように、自己の心身の快適さ（自己の健全で愉快的な生活の正しい享受）、人間理性の適用範囲（自己の理性の正しい享受）、およびこれらを包括し統合する自己の人間存在の正しい享受が中庸として認識・選択されており、しかも中庸の範囲からの逸脱を防ぐ方法も自己の性格や気質に合わせた無理のないやり方である。すなわち、一般的な社会道徳としての極端／中庸／極端の認識ではなく、自己の精神的・肉体的苦痛や快適さおよび理性に照らし合わせて、一個の人間としての生き方について認識し選択された中庸なのである。

しかしながら、以上のような分類が適用できない認識がある。まず、「つまらぬ器用さについて」における事例⑤「ローマ人が喪中と祭日に同じ服装をした」、⑨「極度の熱さと冷たさが物を煮たり焼いたりする」および⑩「アリストテレスは、鉛の塊が冬の極寒によって、極熱によるのと同様に溶けて流れると言っている」。これらの事例においては、一致する両極とそれに対立する中間に優劣をつけることも、モンテーニュの選択を見出すこともできないため、

▽型にも△型にも分類できない。次に、尊称で呼ばれることが両極の一致点となっている①と②、およびテーブルクロスの使用許可が一致点である③。われわれはこれらを一応▽型に入れておいたが、モンテニユはこれらの一致点に特に価値を見出しているとは思われないため、他の▽型の事例と同じ意味で▽型と呼ぶことはできない。そして、『エッセー』の読者層の予想を述べた、「つまらぬ器用さについて」の最後の事例⑯《*si ces essais estoient dignes qu'on en jugeat, il en pourroit advenir, à mon advis, qu'ils ne plairoient guiere aux esprits communs et vulgaires, ny guiere aux singuliers et excellens: ceux-là n'y entendoient pas assez, ceux-cy y entendoient trop; ils pourroient vivoter en la moyenne region*》。「気に入ってもらえない」という両極の一致点が著者にとって否定的な事柄であるという点では、この事例は△型である。しかし、自著が「細々と暮らしていける中間の地帯」は、△型でモンテニユが自己の目指すやり方として選択していた中庸ではない。むしろ、▽型においてモンテニユが他者との知的・精神的能力の比較によって自己を位置づけていた中途半端な者たちである。すなわち、外的位置関係による自己認識であるという意味で、この事例は▽型と共通である。さらに、本稿III. 1. で述べたように、△型には中間が必ずしも中庸ではなく、三者択一の不可能な認識もある。▽型にせよ△型にせよ、モンテニユの両極の一致・中間との対立の認識は、決して画一的・統一的・体系的・一義的なものではなく、多義的であり、モンテニユが個々別々に行った認識と選択に、結果的に、上記のようなメカニズムが主な傾向として現れていると言えよう。

また、両極の一致・中間との対立の認識とそれに基づく選択において重要な機能を果たしている位置関係のイメージに関しては、本稿IVで考察したように、▽型、△型のいずれにも、空間的上下および前後、時間的前後のイメージが見られ、いずれかのイメージに限定されていない。むしろ、位置関係のイメージが上下、前後等の明確な方向性を示さぬ、ただ漠然としたものであったり、一つの認識に異種のイメージが混在し共存していることさえある。したがって、位置関係のイメージは、モンテニユが自己の思想を表現するた

めに意図的に採用してこの枠組みに既に出来上がっている思想を当てはめたものではなく、対象の認識とともに生じ、形成されていったイメージであると見えよう。

われわれは本稿Iにおいて、両極の一致・中間との対立の認識の単位要素として、1. 一般的前提・理屈とそれに反する事例の対立への興味、2. 差異の認識および「極端」に対する敏感さ、3. 対立と一致を指摘した。1. は既成の一般論に甘んじない自由な考察をモンテーニュに促す要素であり、2. は同じ名称をもつ事物や概念に差異を認識し弁別しようとするモンテーニュ自身が自己に課している判断の基本姿勢であり、3. は弁別の結果対立する事物を対比することによって各々の性質を明確に把握しようとするモンテーニュの判断の姿勢と、さらに、一見対立する事物にも異なる視点における一致を見出す柔軟性である。このように相対的な判断の姿勢をもつモンテーニュが、抽象論を嫌い、具象的に事物を捉えようとする結果、位置関係のイメージを媒介とした両極の一致・中間との対立の認識とそれに基づく選択が行われたのである。われわれは、以上のような認識と選択に、モンテーニュの思考と判断のメカニズムの一端を見ることができたのではないだろうか。

注

- 1) 本稿(1) (I, II) は『広島大学文学部紀要』第49巻(1990, 3)、(2) (II) は同第50巻(1991, 3)所収。Essaisからの引用は原則としてVILLEY-SAULNIER版(P.U.F., 1978)により、各引用末尾の括弧内は巻、章、頁、テキスト年代別記号(a, b, c)の順。詳細については上記(1)の注1)を参照されたい。なお、①等は第I巻第54章中の事例にわれわれが付した通し番号。
- 2) 《à la pire, plus morte et croupie partie de l'univers, au dernier estage du logis et le plus esloigné de la voute celeste》(II, 12, p.452, a)
- 3) Cf. 拙稿(1) p.216。
- 4) Cf. Floyd GRAY, *Le Style de Montaigne*. Librairie Nizet, 1958, p.170; 特に身体運動のイメージに関するFRIEDRICHの指摘(*Montaigne*. Gallimard, 1968, pp.384-5); モンテーニュの膨大な運動のイメージを収集・分類したTHIBAUDETの指摘: 《Le dedans et le dehors peuvent être schématisés sans se référer à aucune image précise, substantielle—simplement à celle d'une action, d'un verbe—c'est-à-

dire réaliser complètement la tendance que nous trouvons plus ou moins dans toutes les images de Montaigne.》(*Montaigne*. Gallimard, 1963, p.514)。

- 5) *Essais, Reproduction en fac-similé de l'Exemplaire de Bordeaux 1588, annoté de la main de Montaigne*. Ed. Slatkine, 1987, Pl. 267.
- 6) un'autre : ここは手元の写真版では判読できなかったので、Michel de Montaigne, *Les Essais, Publiés d'après l'exemplaire de Bordeaux par Fortunat STROWSKI*, Hildesheim-New York, Georg Olms Verlag, 1981, I, p.402 に従った。
- 7) この弓と的のイマージュについて Bogumil W. FRENK は、アリストテレスが用いたイマージュの僅かに異なるヴァージョンと述べている (*The Concept of the Mean in Montaigne's "Essais"*, Diss. Univers. of Michigan, 1968, p.19; 《Montaigne's *ἀριστου μέτρον*》, in *French Review*, XLIX, p.56)。確かにアリストテレスの『ニコマコス倫理学』にはこれと類似する矢の比喩があり (cf. Aristotle, *Nicomachean Ethics*, II, vi, 14. The Loeb Classical Library, London, Harvard University Press, 1956, pp.94-95)、『エッセー』には『ニコマコス倫理学』からの引用があるから、モンテーニュがアリストテレスのイマージュを作り直したと考えることは可能だろう。だが、モンテーニュが『ニコマコス倫理学』をどの版で読んだのか確定できないため、これについては断定できない (cf. Pierre VILLEY, *Les Sources et l'évolution des Essais de Montaigne*. Hachette, 1908, vol. 1, p.69; Edilia TRAVERSO, *Montaigne e Aristotele*. Firenze, Felice le Monnier, 1974, pp.97-98.)。本稿ではむしろ、たとえ先人からの借用であれ、その焼き直しであれ、あるイマージュをモンテーニュが用いているということ、それが彼の認識において重要な機能をはたしており、ものの見方・捉え方を表していることを重視する。すなわち、アリストテレスはこの比喩を中庸的中することの難しさと外れることの易しさを表すために用いているが、モンテーニュは的手前と向こう側というイマージュにおいて両極の一致を強調し中庸と対立させている点で異なると思われる。他のイマージュについても本稿では上記のような考えから、われわれはイマージュそのものだけを考察した。
- 8) 「低い温度 basse température」等の表現は温度計に由来すると思われる。温度計はガリレイによって発明され (*Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse*, Larousse, 1985, t.10, p.10200 によれば 1597 年以前、『日本大百科全書』小学館, 1985, t.4, p.517 によれば 1592 年頃)、現在の温度計の原形は17世紀半ばに作られた (同書)。*Le Dictionnaire universel d'Antoine Furetière*, 1690 の thermomètre の項目には、寒い時に液体が上昇する温度計と暑い時に液体が上昇する温度計の二種類が記載されている。したがって暑さを「高温」、寒さを「低温」と言う表現は17世紀においても慣用として存在していなかったと考えられる。
- 9) THIBAUDET, *op. cit.*, p.557.

Considérations sur le mécanisme de la connaissance et du choix chez Montaigne

—correspondance entre les deux extrêmes
et opposition du milieu aux extrêmes—(3)

Mariko OKUMURA

Dans nos deux derniers articles (1 et 2), nous avons traité, au point de vue de la pensée, de la connaissance et du choix que fait Montaigne en opposant le milieu et les deux extrêmes, extrêmes qui, eux, montrent une certaine analogie. Cet article est consacré aux images par lesquelles l'auteur exprime cette connaissance et ce choix.

D'abord, les mots «choses qui se tiennent par les deux bouts extrêmes» qu'emploie Montaigne au début de l'énumération des exemples de l'«(extrême = extrême) ≠ milieu» expriment le rapport des choses par l'intermédiaire et par l'image d'un rapport de position (les deux extrêmes qui sont les plus éloignés l'un de l'autre; le milieu qui se trouve entre eux) et d'un mouvement des extrêmes qui se rejoignent en un certain point. De fait, les objets (y compris Montaigne lui-même) où il distingue des différences de degré sont situés, soit dans un espace vertical ou horizontal, soit sur un axe temporel, où ils «se haussent», «s'abattent», «s'arrêtent», «vont devant», «viennent après», etc., et où, d'un certain point de vue, les êtres ou les choses extrêmes «se rencontrent». De même, quand Montaigne fait son choix, il «se recule», «s'arrête», etc. Donc les deux extrêmes et le milieu ne sont pas de simples termes qui servent à exprimer les degrés; Montaigne connaît les objets et se connaît par l'intermédiaire de l'image même d'une ligne spatiale (verticale ou horizontale) ou temporelle. L'image

du rapport de position des objets de connaissance remplit un rôle indispensable dans le mécanisme de la connaissance de l'«(extrême = extrême) ≠ milieu» et du choix que fait l'auteur de ces catégories: extrêmes et milieu.

D'ailleurs, d'une part, dans la plupart des cas de la connaissance de l'«(extrême = extrême) > milieu», Montaigne distingue les hommes surtout par leurs différences intellectuelles ou spirituelles; il se trouve dans la position moyenne où les hommes sont malheureux ou importuns et, pour devenir heureux et honnête, il choisit de se joindre directement ou indirectement aux hommes simples qui sont aussi heureux et honnêtes en dépit de leur position d'extrême infériorité intellectuelle que les hommes supérieurs dont la position est pour lui inaccessible. Cette image du rapport de position parmi les hommes, nous pourrions l'appeler «l'image du rapport des positions extérieures». D'autre part, dans la plupart des cas de la connaissance de l'«(extrême = extrême) < milieu», Montaigne distingue les façons de vivre qui sortent de la mesure de la vie saine et agréable à la fois physiquement et moralement, de l'exercice mesuré de la raison humaine, enfin de la moyenne mesure de «sçavoyr jouyr loialement de son être» humain, et il prend une direction opposée à la direction actuelle quand il dépasse la moyenne mesure. Cette image du rapport de positions qu'on peut trouver chez un homme, nous pourrions l'appeler «l'image du rapport des positions intérieures».

Or, comme nous l'avons vu dans notre premier article, le schéma «(extrême = extrême) ≠ milieu» comporte les unités fondamentales du mécanisme du jugement chez Montaigne: la distinction et la confrontation (opposition et correspondance). Cette manière de juger toujours relativement en utilisant la distinction ainsi que le goût pour les idées

concrètes plutôt que les idées abstraites impliquent sa connaissance des objets et de soi-même et le choix qu'il fait des images spatiales (verticales ou horizontales) ou temporelles en tant qu'《image du rapport des positions extérieures》 ou 《image du rapport des positions intérieures》 sous la forme 《(extrême = extrême) ≠ [> / <] milieu》.